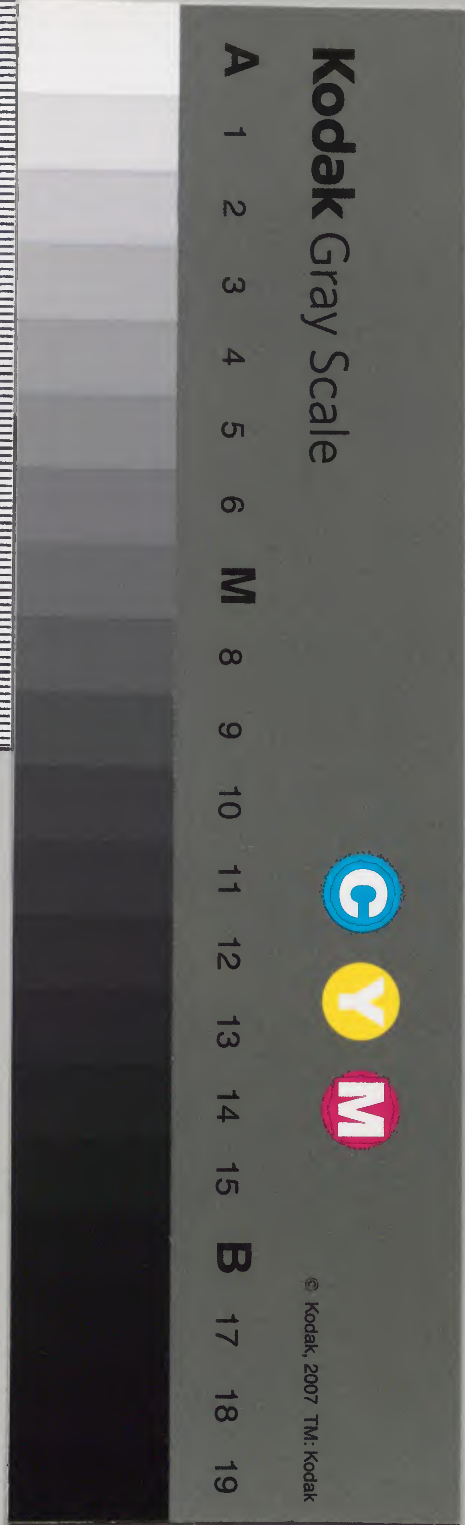


武德編年集成

自具
至卅

內閣文庫	
番號	和 8641
冊數	31 (10)
函號	150 3

內閣文庫			
和	八	三	一
書	冊	冊	冊
類	號	號	號



武德編年長成卷第八

天正十一

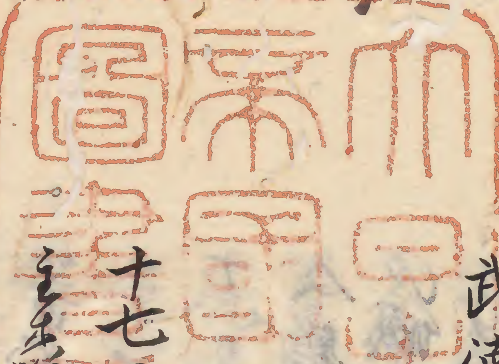
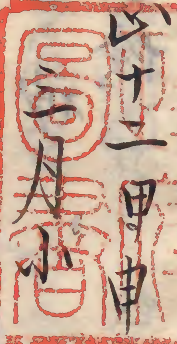


大在方傑州... 武德編年長成卷第八... 天正十一... 押原信...

武德編年集成卷第八

武德編年集成卷第八

天正十一年甲申年



十七日

今日より長久の軍小引

秀吉方濃州金山の城

主兵武將と長可の英武を誇り味方と抽下

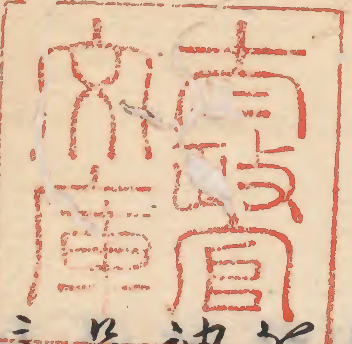
尾州丹羽形相と懐ふに一途に味方とす

と離れ其の多少取敢と著しるが所井也

神君少くは是を討破りたに清村を討つる方勢

是より大に相支 神君の武威を恐るる方勢

言奥平信昌以下も解云と云云 神君信雄



小幡山下の陣州小幡を以て由小幡の八幡原
改張翼す

昨日是田を以て吉田を以て是田の城を以て
吉田を以て是田を以て是田の城を以て

是田を以て是田を以て是田の城を以て
是田を以て是田を以て是田の城を以て

十日兼て 神君希信雅に紀州根来寺の僧徒
及難波の一揆一井上を以て是田の城を以て

十九日秀吉尾刈へ全向せしむに今日大坂とて遠の
へきの旨兼て之福有し。昨日坂の隆乳中延滞
せしむ

あり松々すまの城中小幡へ中田丸来るに序後す
次方丸の地を日並大指亮に屬し切せしむ
主へ小幡丸を獲りせんし欲せしむ城云子渠
に心を石坂城外を以て是田を以て是田の城を以て
一打圍の今も小幡を以て是田を以て是田の城を以て

安く且日をふ心慮を初禮を大務に充て候
う深から感激し候へども許す言旨を大務
ハ子孫に承乳母の如く小児姓中御事切を
凡と携へ墨を越へしるは世帯の同言
才様左馬の孫清盛様二人を不承し不承し
構ふ給へ候様も急ぎ候へども是れ
て大に候へ候様も舟子の城に御事切に
國目山島山住の世に勇名ありしと
と益々候へ候様も急ぎ候へども是れ
す小児の如く光信を送り平様も
れ懦弱の汚名を承へ候へども是れ

の祿の世に候へども是れ
廿一日尾州羽子にて長可敗れ
坂にて考者大いり今日大坂と馬
り程不遠に紀州の一揆を以て丑
の余人二三人合れ岩田の城を
廿二日岩田の至中村武部少輔一
の身方一三四人を斬り又一方の
津を礼好し急押来て一氏と我
と云七百大坂より救未彼是粉骨
ゆ 此の武家宗匠
小見不裁す

廿三日 神君より井那、豊江、清水、加山村より多
洋村の若者と修せし歌

廿四日 春日井郡山嶺の旧城を修し、中多を後置、
孝新元劫之序、山崎及甲陽守山、旧位を以てし、
め、是上州への通路自由ありんが也

廿五日 井那比良の城を築き、春日井一守、信成後井
及赤川、金屋の民、後田新左衛門、春日新左衛門、信成
とて、新左衛門の民、後田の民、春日の民、既に春日の先陣法

州、金井、志波洲、段々あり、後陣ありし、治陽の醍醐
山科少将の春日吉忠陣、以前を別と定、軒首八首井
四守定次後田、伊軍を以て、後田ふん、伊及後田、

時、監使たりし二陣の右、山崎源左衛門、行家池田源
次郎、春日多勢、新左衛門、春日家左衛門、浅野河内守、長
政一柳市、今世、重之陣を以て、好孫七守、春日次郎多勢、
西翼、不列守四陣、六長谷川、五守、春日一、八根、
佐中守、山崎本村、常陸守、今世、重之陣の右、坊久守、
春日、細川、越守、五守、陣の右、民家、同、播磨守、廣、
左守、元伊、源左、本下、春日、源左、石見守、昌時、小川
孫一郎、春日、七守、陣の右、山崎村、長谷川、改、玄井、甲斐の
士、左、八幡、生、忠、三守、氏、御、八守、陣の右、伊、左、朱、助、三、田
小、文、守、谷、三、助、五、守、在、左、及、柳、三、前、長、播、石、川、小、七、守
田、中、小、十、守、吉、政、九、守、陣の右、右、八、守、利、河、内、守、春日、

功高助西儀松種与八郎、夫能若七郎、池田之存、
知政増屋、吉田、古田、左助、在浦、松平、如三、清、
滝川、美、津田、日、多、丸、湯、以、子、旗、中、の、前、使、
本、下、白、在、湯、の、生、然、源、助、地、村、内、近、後、記、犯、伊、度、清、吉、
長、実、多、実、宗、十、郎、高、實、曰、在、是、木、村、孫、一、層、の、秀、
俊、形、城、在、湯、の、長、志、之、城、友、在、湯、の、有、り、秀、吉、の、馬、也、
由、は、健、士、安、卒、是、様、来、團、境、守、後、夜、八、藏、田、之、市、田、
市、富、田、平、在、湯、の、知、信、小、池、米、清、次、市、本、清、後、松、
正、則、本、下、仙、流、吉、吉、彦、在、市、片、相、助、作、在、盛、吉、川、
在、八、市、長、敏、津、田、小、市、軍、記、古、田、彦、之、市、糟、屋、助、在、
湯、武、則、川、尻、与、四、市、市、田、之、市、三、清、孫、志、松、之、市

則房加友虎之助清正加友孫六郎、前、不、忍、軍、様、武、
万、五、子、解、人、と、云、云、

廿二日、記、刑、下、行、く、秀、吉、方、白、根、村、氏、湯、川、の、諸、君、を、
責、く、之、切、を、扇、守、由、此、を、切、り、加、今、の、感、書、を、送、り、

湯川館口押寄の儀、志、吉、氏、比、類、以、給、
也、湯、川、館、口、押、寄、の、儀、志、吉、氏、比、類、以、給、也、

三月廿二日

白根左衛門尉友

湯川左衛門尉友、曰、四、市、三、清、を、外、之、人、討、果、首、を、
奉、在、湯、の、尉、先、陣、有、り、心、を、切、此、類、の、
湯、川、右、衛、門、尉、友、肝、要、以、給、御、井、新、助、の、

平

三月廿五日

秀吉

白根を占めしめ

廿六日 秀吉が白根路への岩あり

廿七日 秀吉が鶴居の舟橋大石戸の渡りを断り午
の別丸山の城にあり池田小対龍一はあり當
城よりとていふを切速にぬき池田に林あり即大
山より軍を小牧山に率す未の別秀吉が鶴居
と携地別を監視し小牧山ととりぬんと能すと
とも車旗の旗旗の山を翻すると見てたよ梅
いろ小牧山に向て若松を築くめんとすまは西

陣の間ふ二まに治をありありと名を築れ淵を振
りくも若八日根陸一様あり式子余云山湯山の向城
小稲葉一狭芥父子四子余云小松寺山五舟舟
ありた徳の長秀あり余云青塚に志茂花と内陸
山に鶴居の羽守鶴居金糸八五舟八長辺と子
余云とていふの量定る教令をとり大山あり
と名陣あり

廿八日 神君清洲の中城の内及三長徳信成と丸に
三宅お在徳の康貞大法三郎大捕暴者中廿五回
序定安をいふとせられ 神君河津陣を小牧山
よりける時は秀吉が浦和に小口末田小也法徳雲六

小牧より押寄あり丹那二重砲を後山に備へ備
万全不慮の故にふきとて戦ひも又陣取へて
とも見くつりしれを味方、小牧山の麓より砲を
くそを待たせり 神志酒井左衛門尉とて
敵戦を待たせりと同様の白飯に未の別家
勢強しとせり是陣所よりくそとてくつりし
者ら矢切ありし卒の軍をわの女とて陣又
と清洲より難具と運しめん守果して秀吉
の詰りし陣よりわの女をくそとて無火敷し
事略の目録に似たり 神志甲場三郎兵衛氏
清田臣當時井伊三郎少輔は附屬せしは、意略

秀吉より丹那の形事ありとて上方の大軍
とらよとの命ありし人を見小牧ありと述ぶるを
実と尋じし當時秀吉に軍旅中精兵ありのるれ
を百万といふも不可恐上杉謙信の父子を以て武田
の二二万七千の四五万に對し、こゝに七千及び軍實出軍
勢多し中依りすと云上杉時義酒井忠次白長源
に、備れしを方五子、結句秀吉此大軍より勝に
るにありしと云り 神志中多主領とて水曜志
を以て星崎の城とて、めると小牧山より
之を撃つたなりと柳大砲を撃つ、これに秀吉は
平大と謀初時より秀吉指し、決て以静めり

一決二重を断つる勢もあきふいりて周章
する所と大なるに罵りしは是れ信陣の静けり誠な威
三村の述る所のとて味方大に競と云云
廿九日信雅揚州大河内の城より小牧山より遷り陣す

四月六

廿日池田橋入斗策を定む 徳川及豊國より
立陣然三州ハちる云々 空國たる人を慮小宗し
欠之傷小責入人云々 秀吉を以て成諱容し
三好弥七郎秀次後和國と名師とて 森中成村と長可
堀久冬郎秀政援助とて 橋入云々 小畑て三方
余云三州より礼入す 其旨申知せしむ此日秀吉立陣と

表日井那小田より遷す 以て柳原式部を補康政亦田
一重物に信陣の書牘を傳へて曰秀吉既に忠告
を名知して信雅等と云々 柳原連の意あり 孰り
是とてあまのこひに信陣が平生何とありと云々 礼長
に云 信雅はあつた礼を政の信雅の所の屬と云云
秀吉を是と聞て大あしり 康政。首とてはて吾心を候
すものハ賞禄を乞ひ可成と命を下すと云云
廿日三州岡崎の商賈小牧山より遷りて 池田の勢
へ礼入す 其の旨を聞ゆりて 謹勅する云々 と言上次
神君之若事日事と康政等と云々 汝亦必辱あるあり
也 押付きたる在る及んぬいままに 其語を云ふ日間

あまの侍りくきの音と流るれ流歌の中ふ徳者
とくし家

七日右の紙尾州表の井那藤木柏井の口合を
神君へ注し守家木柏井とあはるの名也此大出
智神尾泉内津一巻八州と系久木も市場松木
右迫百神名白山お川橋松園田監理田午毛堀内
右栗神領上大富大る足振る花寺も新か系以
上三十一村は皆藤木の庄の内也松川下村上藤原
中切以上四村は柏井の庄の内也今園の刻池園三
州へも陣する在園の振燈を本園も奈寺味方の間
者ゆり来て是ふふ上する也河川 神君の合を

以て神系原政大原は原なる水陸舟を印多原を
是故も成於合之子八百中余云彼は四の斗能の
後を踏く我へしと云ふ小牧山と奈すといふも
能所もこれと名知

甲陽志書云曰 神君世間小牧山は目下の
旗との斗略をあらはし斗策立能又
立退ともいふ

八日尾州表の井那岩村の城主丹羽勘介氏次末
て相濁す時ふ 神君意き帰る城郭をのちう
宮の氏次曰臣流るの地利由精く必り守ると
く忠戦と可き言とす 神君渠の家臣丹羽

も藤原の跡を去る事とて岩崎の跡を尋ねる事
も真ふらぬを演説す事不致す 神君依小幡
表ゆきを道にいひし事ありと近臣を以觸傳ひ
今更の別秀吉の軒首池田父子四人二陣志成
三陣惣大松秀次龍泉寺を祭之別子部く 神君
高丹左衛門尉おゆ三子石川殿を右衛門とふ子
六百中多平守右衛門もに六百兼信雄子の事とも
小幡山の跡をありの別丹伊万代志政の後子
と軒とて心旗平の子傳云旗籠を巻く高小
牧山を祭しあり信雄も微勢少と張尾少衛門
を祭あり曉天ふありと味方柳原大原實以の

六郎秀吉丹那小幡の城を去りか多松次郎原を
小幡携へ稲葉村のまに部く
九日松原池田掃入をて是知於流村岩崎の
城を責て大に恨み後陣之好秀次は去り丹那
稲葉村の上も惣朝飯の沙汰すり然も 神君の
お抱籠ひつりて款一万余を打破り追打首
若干をゆき何を祀り岩崎の山の山を以秀次
傳ふりて秀次が不脱幾く味方又利を去り
針敷をぬせり 神君既不松原の東南の山
近押事あり岩崎の城ありあり砲を撃
く事ありて山の山下去り丹那の川を以

岩崎藩藩城と足つて城を揚る處に於ては程を
て石黒普光等は湯濱を放す己の別白山林を於て
先鋒二羽掃利の一表首水野及十郎掃成を特
命し上野入をせり涼河旗をさする如く又井
伊直政始味方二羽敗績の告あり然も直政は武
志を云とせ智於去作村ふしよ進ませ伊旗か子
回於長久を村へ押せし原井伊の志伯一戦と始は旗
印と之の見しとて競ひしを池田直政の糧糧を
討破りしを誠は假也の神策あり然直政は別
の掃軍めてを士卒離散ししを折柄 神志の
池田印と見て大に驚きし池田直政の糧糧と云ふは

んと欲しし如弱ふ不見器しと直政も亦是を
武花を火炮不申りて死し池田精入を痛恨伊
之助とも命令を預りて男之能の輝政收心の時
は直政父兄の存を代尋りし如直政は然と精入直政
し由代述るる輝政死をせられしと男直政等
長官の直初直を尋りしと先達しと柴田少輔
の命令を不夫秀吉の三好秀次敗亡の告を必
午の別を標とせし長久も亦直政の勝敗をせん
為柴田を命せし直政を軍統述述せしと
し直政の直初直を尋りしと先達しと柴田少輔
の命令を不夫秀吉の三好秀次敗亡の告を必
午の別を標とせし長久も亦直政の勝敗をせん
為柴田を命せし直政を軍統述述せしと
し直政の直初直を尋りしと先達しと柴田少輔
の命令を不夫秀吉の三好秀次敗亡の告を必
午の別を標とせし長久も亦直政の勝敗をせん
為柴田を命せし直政を軍統述述せしと

程卒百人と長日升を控く小幡に討つ時秀
吉の大軍とを間僅く可ふに次は皆討入
秀吉ハ忠信の豪傑たるを称す一先と不許世奉
て忠信を褒るる名將一尾州系栗那馬田より
信雄の巨澤井左衛門尉も久々に討つ 神忠信
雄如河之坂目の要地に居るも何となく未
也と宣ふ次井曰我も城を四方に火砲十
丁を以て守るも防ぐべし依て四倍に強く
當陣の唯唯免束を起し依て必勝しと後に
ある程馬田と名を傳へし世軍東方敗れざる
論を多くとと変りて君命は非すといふも死を

多に極めてまねといふ 神忠感心しり
神忠信雄と云ふ小幡の城に入り秀吉長日升
童泉寺にありしとれを以て憤りを發し小幡の
城に押寄せ討入ると戦せしる稲葉一鉄并に小
幡と云ふは時小幡より 神忠在候と討つ水守
也ト歎今然然然と云ふと何せざる惜しむる
謀を傳へしと歎ふ忠信も人の由を述る又昔は
左衛門定政を以て勅諭を仰ぐめは歎難を抗
て飯食し方と休め急ふ事討つるは必死天
不可説なり此小幡小幡の首を討つ小幡の
陣を討つるの抗の首を討つ上次に討つ謀は

是を病 神君を尊て是を欲す旨 今あり
て忽ち信雄と云ふを小牧山に収めり
秀吉は信雄を集めり水信雄 家康と云
ふ小幡よりと州長信雄を圍て自らと一時ふ
織とん事是天の命と云ふ悦び時ふ 徳川家
并信雄小牧山に軍を之とてあつて秀吉は
拍て 家康の命を用て事神のこゝろ及ふ
所何と云ふと云ふ一就家康を去て田中
の移らる

備後守今日味方討た首級二万二千五百
餘級あり 此家人の切石あり
田中記す

初麻野信雄の西度切石ありて法助と云
免許せしれ兼初信守 若狭越前守田中
守不念存の切石あり
系尾家傳は榊林近江守傳の時と云
一隊 表武元
ちり坊 山より落し掛ると云ふ
小吉大久保新十郎渡部忠房の切石ありて
首級と云ふ傳は榊林系尾四郎次郎
晴近信守の切石ありて信守の切石
と云ふ 法座札の信守と云ふ
諸の信守と云ふ先をすといふ
晴近信守と云ふ一編集と云ふ
市田守信守と云ふ一編集と云ふ

上林家傳小冊の士高時三州古島の
目上林家あり政重も志の語公武入を討た
少感状を繪とてつる心後山城を治に詔
賜ある事と少治すも不端も義の及
中國四王法西の法士あり跡を傳い少元初
を彼府後に其武場少治をすとも難發
して少治と稱し 神志の爲にあり
あて志死すと云ふ

十日秀吉田中のかうり龍泉寺小軍を阻む
十一日先に勢州最の城を没落し古久間龍河を
正勝并河城して楯を重きしを蒲生惣兵衛と

園を責むり関子鉄味を蒲生家の故陣に居る尾
より攻入るとに最の城を奪はれ山城に正勝尾州に逃れ
日河曲郡神戶城を林とて居り河川の東の城を神
戶藏人左盛経居る國府の國府四郎次郎掃子
程淡田上木も没落し濃勢かかると井城に赴き
筑城して其神戶藏人志を奪はれ織田信
兼を殺して津へ去る

十四日秀吉尾州丹羽郡相志の田城を破り城を
介山内指原伊多掃部介を築き日野大山
の押さるる田小と城を捕へ稲葉貞重を谷
川秀一とてつる事ありしを自ら小冊に記す

初日係曼陀羅東是二主塔也ハ酒東郡多塚
山ありて岩十余ヶ所を築き東西中軍の三
部を定め互不控勢の教を下さ長久寺大改
の後のことなり東方の地は万石西方の地は
六千石中陣番吉の地は同く前後兩部の備
四千石後軍浪野福地万石彼是惣て八万余云
と云く小牧山の三方を圍と云云
十六日榮田鬼九郎別法にてもと力を好む井
伊豆郡少補を改めりて折屋を建てて 神倉より
羽州月山の銃刀と相更す時小 神倉より船を添
て是を移す也

唯今も矢代中侍の長子國の英帝後
と切まの焼くは朝の陣に六次信長
是を幸めり義経は河をわたりて
あきりて獲る別巻

鬼九郎と云人ハいをす
四月十六日 水原伊判

世に孫希雄叙身言元甲子年松平義
家と綱色家臣榮田之平也又 鬼九郎今以

傳來之報 常憲公の 台聞と應と云々
高木家記曰秀吉より高木程房の兄弟
ヲ移不使節をきく味方お振る程房の敵
てそに意を次濃勢野の名城を昆才
と移し立小牧山におて世軍を述家
神志沙威元儀と云々

十七日春日井那外山の麓野原松平直政物小
會せしむ世若と出の素譜代の信長之と云々交
代して五ヶ日つゝもいゝあゆ
廿二日 神志信雄一乃、ふをいゝ其隊と一乃井た
内尉井伊三郎少輔と見録り 戦と移く二重堰

の麓の前より東の麓に押りしめ二重堰の西を浦
生氏の城を改甲斐の土奈也二乃余小松山の中
傳へ軍便を以速いされと行なりしめく援勢をき
しめくいゝと秀吉の曰勢をいゝ入るは傳をいゝ
く折返り防戦すしめくもそより云々色の軍をいゝ
のうりよりいゝ處へ意をとりしめく味方も又二重
堰の勢をいゝと見ては討ん由と云 神志も小松
寺山の秀吉の旗を二重堰を越えしめく(弟)一戦
を改すしめくは時を敵陣に結しめくとも否
兵を討率あれと云よりは意をいゝりて先鋒の
勇士迄て戦を欲しめくとも故て許しめく(弟)陣

小川を過くおと軍時を悔す味方の仕立不
と色あしく敵を打ち事績不堪たりとの
方終る午の後刻沙由知ありし 神君の十六隊御
何を以て列を以て小牧山に列入 神君を
の時山原氏より使来て長久年の大勝を以てす 此對
申部
長日礼を長尾元景の旗十二の百と云ふに
ありし秀吉曰係曼陀羅十餘若と名乗りの後あり
或日文禄元壬辰肥前名護屋少く秀吉
松原の志先年二重堀を築くを築くあり時
味方色あしく立たるを以て打破ありし
と訊る 神君の目を時を仕立不
軍を以てと云ふ小松寺の世名の云と云

城に引月有無の勝敗を以てせん
是を制して戦ふありと官の秀吉
と拍し家も亦二重堀の勝を相共
彼軍生を打破くを以てせん 也を小松寺
を築くは是を破らんと欲し 朋勢を以て
して勝を以てせん 也大軍代以てせん
是を討て一掃も漏すありと事と欲す
由と官の聞の相共食ありと事と
神君依通徹ありと事と称致す
山原我員曰はれは末寡を以てせん
英傑多と云ふも多かりし敵は庸愚あり

九月長久手の役、秀吉早議らして自死
と武略にもく、昭敏銳勇にして悔もな
き十倍の大軍をりけり。神君の羽翼
たる信隆、暗急ありて諱す不及、次は
小神君をいふ池田の謀を承て曉く思
彼云と之州を奪するをいふを均く大次
賢柳あるの謀を承て、敵の志を破るは
勢の中ありて是を討て我軍知を大に勝て
後に敗すこと、いふも言を承て、柳も
怖畏の情を起し、自ら急に歸るは、旗
とす。めを疾事、其のことありて、瞬息の

因小勝事、そのいふにも地勢、其に松す
敵の位を討取、一乃お子の首級を奪る
実、亦に雄偉、古今に獨あり、いふは、山
と、柳の土居、柳木等、此の役も、此
世、亦、敵、却て、二至城の要害を修
三子、此、を、承、あり、いふ、を、備、甲、傷
の、之、之、所、此、位、五、所、武、對、皇、太、の、陣、法
と、擬、して、秀、吉、方、數、を、も、張、羽、異、也、之、禮
二、首、を、城、を、守、る、こと、敵、亦、上、方、從、新、の、猛、士
と、も、一、て、皆、く、防、戰、を、い、ふ、も、た、見、内、も、を
誌、受、り、る、也、此、も、吾、れ、大、より、勝、入、り、文、味

方勝ふ事、追討必二重城の人殺を解法
とて、新守の西城を以て、西城を討て、忽ち
亡せんと欲せしむ、味方のことと押す、
且、敵は、初ハ、言解、と、秀吉の心、
其、後、を、待、て、彼、競、り、争、ふ、押、来、り、
急、に、二、重、城、を、押、破、り、類、不、追、逐、
勢、長、久、の、大、敗、不、懲、て、表、裏、
不、分、り、大、利、を、得、り、
代、未、聞、あり、又、秀、吉、怯、弱、の、如、き、も、
は、福、船、邊、の、不、屈、
た、り、と、お、多、志、
神、兵、の、英、雄

稱、美、の、大、度、
の、地、方、と、謂、つ、
松、平、康、直、を、
城、より、
切、の、銃、士、
其、昔、の、元、次、
互、々、人、殺、
七、子、た、り、
そ、人、を、
と、去、り、
と、去、り、
と、去、り、

松平康直を、
城より、
切の銃士、
其昔の元次、
互々人殺、
七子たり、
そ人を、
と去り、
と去り、
と去り、

廿五日三雲奴侍忠を信推へる人寺 神忠威
激しき言とゆふ

三雲新左衛門尉及
三雲新左衛門尉及
三雲新左衛門尉及
三雲新左衛門尉及
三雲新左衛門尉及
三雲新左衛門尉及
三雲新左衛門尉及
三雲新左衛門尉及
三雲新左衛門尉及
三雲新左衛門尉及

天正二年月廿五日

三雲新左衛門尉及
三雲新左衛門尉及
三雲新左衛門尉及
三雲新左衛門尉及
三雲新左衛門尉及
三雲新左衛門尉及
三雲新左衛門尉及
三雲新左衛門尉及
三雲新左衛門尉及
三雲新左衛門尉及

入疑
州ノ字ノ
ウ

もの陣中にて生捕りこれに就く且款の亮
便を捕へ携り此の浪書と云ふ是を携り
福貞河内小笠原内膳助木曾
共日先に長久手に於て永井侍八郎忠清の
池田入を捕入るをせし入荒井の市軍毎道添三平
と云ふの浪書に記すと云

或日秀吉惣領に船橋掛へるの旨を知らせ
新木村を援助を茲に程法軍務したる
折柄逃れを憐れみ候へば味方落度及
申及んとし秀吉一云の返言候は是に
勢難祝ふ事候と云ふ所を以て返す

秀吉も鋭氣なりと云ふ

機場松の里。董城の滝川三郎。日吉大塔。神君の接納。後部鬼半花四十日の月。鏡勇とある。ひ跡。戦くを。扱方の。雲の。ま。後。佐。小。比。立。尾。夢。家。成。以。く。和。を。整。人。と。と。時。は。城。内。も。糧。米。乏。ま。む。人。と。す。お。ら。れ。を。許。容。一。あ。ま。り。私。と。と。て。火。炮。り。矢。を。使。へ。人。質。を。請。九。款。と。膽。一。合。へ。形。は。浮。尾。州。多。帰。る。神。君。方。に。城。内。お。り。銃。式。を。称。賞。せ。れ。ま。た。信。雄。も。も。日。吉。と。い。く。神。君。の。臣。と。か。い。あ。れ。就。丸。受。り。と。も。い。は。し。り。到。り。原。あり。と。云。ふ。就。川。之。身。三。部。ハ。後。年。秀。吉。の。家。臣。と。し。て。羽。柴。と。

賜り下編の事

廿九日秀吉大森の寺内戸。跡。東。花。坊。り。構。を。以。て。築。一。世。田。に。款。首。と。い。は。し。し。と。も。海。老。河。つ。く。松。次。丸。秀。吉。を。入。ま。す。

晦日秀吉。後。部。鬼。半。花。令。一。て。日。明。有。無。の。一。戦。と。改。す。さ。ら。に。用。意。一。く。螺。の。音。を。傳。へ。一。家。初。浅。野。長。政。の。命。す。り。あ。と。く。家。列。を。あ。ら。は。す。の。音。形。り。時。あ。木。村。常。信。介。先。隊。を。足。と。し。し。と。も。秀。吉。元。より。戦。心。あ。り。た。不。及。也。と。い。は。し。諸。軍。州。日。の。合。戦。強。く。危。ま。り。由。と。稱。す。

武德編年集成卷廿八年

武德編年集成卷二十九

天正十二甲申年

五月小

朔日秀吉昨日の教令をて受て徳器をり集たるは
七種一卯の別より修徳書と題して其を引取む
既小宣の別より用意して幾人とする徳軍大に仰
天正十二日信濃の一妻細川越中守忠興一妻是日
根野兄弟木村吉徳介を茲神子田中重徳の正治三
妻長谷川友成守秀一加友作内光泰具備忠志之
序氏御承り秀吉の書嫁の上は是より是より小牧

表と監臨し 佐川家より増募し下軍の兵を
留め切し勵す さい首と云田助將由孝なる者も
近実則を抄く 並丹羽郡樂田と云引九夫所は堀
久を即ち赤坂と抄く 大山の城も加友仙内と云
鶴河の舟場と抄り 大難逆列入る時 信雄は
神君に向て小牧山より急戦せし跡と云 兼平は
ひひねり 神君は敵大軍の引退伏忠のりか
らん 謀と改幕のへり 次と信守を戒め
る 教令いさるる 前大槻物居の 大原久親
の信雄の仕士并候と称し 二十騎斗敵の芝を
追まき 土居の内迄大槻を系歩の立にあり 麓の

入大槻家の子孫と云 一巻に徳と合す 忍
川宿の内より 込村 大原 朱の日傘 武人
の多 白絹の櫛 由天道 といふ文字とある 標地
ゆき 池の魚 大槻を斬断し 傍山か又云ふ 芝
と云へ といふ 又 忠告 貴の大原久親 子孫 向久
花鏡の柄と云 赤拂の居 退め 芝を 掃き
あけ 芝を ぬき 久流の 赤坂 並 馬 担 居る 由 久流
川 渡り 水 あり 退く 信雄 あり 討ち 首 十 余 級 あり
世 時 小 牧 山 より 大 軍 を 引 退 け 喰 肉 音 流 云 考 考
古 流 伯 混 乱 する 申 浦 生 傳 の 三 誓 たり 山 本
又 三 大 槻 の 首 級 を ぬ け ぬ 忠 貞 の 信 守 あり 山 本

も切名寸大石清就園於五日早朝自物も陰と
合せ細川一隊のそそ級六也均て彼士亦被殺の近
口と大に業事しす日根野木村に初陣する値と能
五程とこれと立並し引たる日根野の軍士も初初
監減田方のそそ級成りとも云

曉不及て秀吉今朝退口の別後とれされ細川家
の山中又之小令のし舟の力日家軍の細川と助と
根指日根野家のら初も賞を施す初神子田
も名譽の傳は留りし初立並寸事と初見若し
り一事を禮向る初も長孫に激勢のしと初自陣
謝し先ん秀吉の汝も初初とれは共し一時是初く

あ士十人平也と又も信る事幾多とやとあに
あ一後まに殺すも秀吉今夕より大羅の寺内
鳴東花坊の館の若よ比せし家

三日秀吉中嶋那富田の寺院と陳と移す日信雄
小好山より勝州飯田於大の内近帰云り後日名雄の居城小を

入と云

四日秀吉はるく大坂よりまきく云とゆり一取月家と
西に池田表の猛勢と討し先方とて切外と務
と初ん事世のあ小野り笑ひあへしとて信雄方志
州加賀能升休の鼻の西城と接んし能守押尾州不
四家七を初て十一堂とあ初り先四家八大橋是也

山川恒川あり七名。坂田正隆、源朝経、木真、隆光、
朝河村あり世十一家と想て、吉野の十一黨ともま
ち、十一黨九族、南朝の元才、年申、尹良、親王
と吉野より上陸國あり、あつ世軍、臨まると
軍忠地、異あり、と後、北朝の永享七、乙卯年より
尾西、海東、郡、津、等、に、住、と後、亂、今、由、尾、州、の、間、
あり、あつ、世、軍、の、今、及、と、無、二、の、信、雄、方、と、と、加、賀、陸、
井、小、等、電、秀、吉、大、小、僧、と、洲、役、川、を、涉、り、曉、天、と、世、城、
と、圍、て、攻、打、軍、急、あり、城、中、も、と、と、行、か、つ、陸、井、
渡、河、等、と、と、源、八、郎、秀、隆、渡、田、と、源、八、郎、楠、十、郎、小、坂、
九、郎、雄、吉、辰、五、郎、上、木、清、九、郎、小、泉、甚、六、郎、小、野、子、

三、郎、九、郎、の、林、と、大、野、園、十、花、如、後、太、原、隆、興、の、且、四、家、七、名、
の、勇、士、粉、骨、と、と、と、防、戦、す、と、勝、一、子、孫、と、と、云、去、
五、日、前、子、既、に、責、入、殊、に、細、川、家、の、澤、村、村、力、八、一、美、
と、赤、花、松、新、六、近、及、久、五、郎、宇、治、玄、介、有、吉、太、原、助、
松、田、善、三、廣、秋、田、分、吉、又、春、と、勝、守、二、の、九、川、小、野、平、
井、渡、河、と、法、村、力、八、一、美、と、合、せ、と、と、組、て、伏、り、る、日、
傘、の、大、標、物、虎、鹿、竹、の、間、に、伏、り、て、初、手、力、八、一、美、に、交、
て、危、憂、と、城、中、より、つ、を、軍、さ、地、か、り、る、周、章、と、と、見、
得、り、上、る、平、井、と、三、港、突、つ、る、を、時、味、方、追、て、救、束、
と、多、く、款、包、城、中、小、野、九、七、八、五、息、と、も、利、と、と、得、て、別、逃、
く、平、井、の、首、級、と、得、り、る、号、を、二、の、九、と、責、破、り、平、

細川氏中より六年并の首今日の一番切名
ありて八八の約也秀表の印陣小送る

六日城云和をこしとてとも秀吉許容ふしので今次
鶴崎の城城云ゆれ大より一回も突かぬれん
と欲す一と僥倖とて死戦とてさる林新お迷ひ
時ハ新病と稱したまへ城小勇を揮折抜
る勢もも銘を列し力戦す中浦生氏御池塞
り士卒を扇す如く向ふより二士名白氏にたれぬる
と四ハ浅野原を浦内生約法な徳と稱す氏に
是勢の虚なき事と悟り上坂た又ハ吾坂小坂口花
とて小槍を揮て倍敵武八を殺すも外暗を中
突奔るもの若干ありて槍の先曲れる事あり

辰陰三郎楠十郎ハ五及の突少年あり氏に
屬めし誅すの系三郎信の是氏御の縁親あり
る事も屬と成て死をぬか桂木清九郎と信四
人殺すもとて間小城が加賀井父子林良太郎
の城ハ小後門より道れ去る危角すりも小曉天
り氏に多し村掃部介を始百余人を斬獲す
七日徳州外ノ鼻の城へ此首秀吉の馬ノ地利
と吹ん今日殺す人との是を圍て四方小町割と
成て一色に小屋をとりあり町場を定む堤を築木
首門を堰入城郭を浸責めせんとす
十日外ノ鼻城色の堤が能く水は溢すとて

堤は高きとて
中十あり

天文の江州の佐々木兼頼父子許慎の時より
我彌之居城比田を以て水攻を以て利ありし
時秀吉伯申より此の城代水責より臨み
しりし水攻を善とせしむ

五日伊東三人枝居虎吉率寸 享年七十三
甲陽の日記

此月信州福島の城主比田内膳討死す 神志の
味方依田小重宗より懇く之を心と御守渠ハ當時上
松の旗下ありし系譜いらく云と云く川中河
津の城代上原山城を我妻 号辰富
山入彦も又逆謀の少
ありしと系譜より長江の城代津津路規久
が戸形と尾佐村左近喜日富と結んで海津之神

へ川福島の城を責成し 長江須田を以て
長氏及國云浦村に 一々身より城云或は討
て或は走る

六月小

七日中鼻の城を不破源六郎 百餘人 水攻を逼り
其城深難なる所を城におふし 和を乞ふ者
許容せしむ 然る秀吉より加州金沢の利家返
簡を授せしむ

一 ありし頃今日も未だ城あり

一 此の鼻城は和親校内少将の所なり
つるより水漬りの殺傷ありし事今も

物々七百石物下とび一未十石退分ニ
一 尾州河邊の歌城の悉くの遠近差障々
十の物九つをや尸も際を又七石の月氣
一 爰光のりとして才法哉由か否を才静澄
此上の中二百石法返返し竟然言の有り
一 爰光のりとして才法哉由か否を才静澄

六二七。

前田又左衛門

波色家並に久保家の傳は尾州美栗の
田の城と信雄の居は井修理をを
援云々々々佐久首路河馬山掃久保勘次
侍政前井在處の且 神君の援は管沼
定魚渡道並は古法を考し
新しは井修理の丸を考し
又と守秀吉又當城を水責せしるは井
地利を詳し考し堤坊を築く水と
入島を相討し十三人を斬り
神君の遠洲の御陣且信雄の
石城長徳不送と云 神君より大久保新

市志隣を以て福を久保に換ふる曰ふは方
城に日下郡在道と云ふ事也 弘治井と和
みして先より及る旨 上聞を達して信
信雄より日下郡小死を賜ふべき旨を達
せしむ久保將軍を以て神君に歎祈しよ不
井日下郡と和融し一切を届す此後追る
言確に達し 神君より十文字の旗を久
保將軍に賜ふべき事此時成す
十日赤鼻の城に石原六光治城と云ふ後
洲の南。秀吉一柳市介並末を以て船の儀と
軍を大垣の城に納め給

十日秀吉大垣より多藝小笠と名へ一柳市介並末
繩生之岩と築丸毛之原を親吉を以てしむ
十日酒井重利村と小牧山の陣を以てしむ 神君
清洲城に居ると云ふ事
十三日蒲生氏以て勢州兼名村に居りしを以て十二日石
秀吉より先達して送り矣田丸次林山等陸津川之
の村に諒入神田修理中村に居りしを以て親原
と秀吉より氏以て勢州兼名村に居りしを以て親原
改此時田丸の城に再渡し関原を親原一政も衆山
の城を賜ふべき事あり氏御と云ふ事ありしを以て
飯沼那河段の城を八生駒源次郎に賜ふ事ありしを以て

ついでに
疑ふは子
の字を統
す

則修城を修る
廿月中旬信雄は越前州粟名郡長濱小立城に於て
佐久間波河守正徳石原の尉信登。初島九郎と云ふ。波長臣とて居張
河東郡蛸江の城を治り之に所属する粟名郡前田の城
に是前田甚七郎長種後長種と云ふ。海東郡下市場の城
に是河内平治定利長種中野郡大野の城に是山口長
次郎を改後長種立城とす此より信雄佐久間波河
守とて河内郡菅生菅生の要害を築くむを為さる
前田五十郎長利と物多し此れは佐久間正徳の母方
の叔父也河内滝川に在り此城一帯に河内守あり兼て滝川
に正徳の正徳と云ふなり菅生を改姓とす幸らして五十年と

すめあをを夏一秀吉不逞り此五十年長利則は
久間正徳一人と害一叛心の色を立滝川前田と
相離して山口長次郎を改り方へ使を以信雄と云は
る事不討一恨有る前田父子三人滝川一帯小郷々
秀吉不逞り此も速不河守す一と云事遠首せ
ハ菅解江守の河守母を殺害す一と云去を改掉
りて曰予幼弱より正徳不仁之恩と云き自事年有り
今何と云心と云へや如汝不常縁と云食り君恩を忘れ
秀吉不屬してあり正徳に送る貨人を害せんと欲す
吾忠我の爲不母と不者菅城を治る余を殖す云
の首と云は法洲長一と菅生を援云と云

十五日松平入滝川一益を九鬼右馬九之軍船に千艘を
扱出せしむるを不承して九鬼と云ふを云ふ余大膽
川に漕入城堅舟迫り是を責る山口を改松原を
投入敵船を焼く二艘をに打ち敵軍周章し地
の上を登る如く山口大炮を祭す或は許を捕へ悉く
お殺す井伊三郎少補を改松原の心あはしむる
山口の告をすくすくを祭す海中に柵を張りて
新船を造りあるを款垂し以て未済事かして京
信雄より梶川五郎右衛門秀重を坂原九郎雄吉と云
野小巻の山口を救ふ
十日秀吉大坂の城へを入今朝滝川一益を夢に力

仲小巻の 神君は滝川の中入するをすくく船状を懸
ひの馬の由成書す 信白如の時を一字と云人
疑と生す可の字にしてを様後一馬するを也と云定
の文字を可書す 今ありて井伊三郎少補を改松原
小吉に威扱れ集と君臣僅山三端ありて途何の由
旗本の健士二町あり候と云と地を小幡劫云浦系憲
西の武士ら矢向上に候と云ありて候と云あり
信川を利を治せしハ長久寺の大橋水ありてありて信少不測の處
智と云云
信雄も云と祭す 神君急に信江の溪も小巻
久ハ信江川も今大坂入りり信滝川一益小巻にあり
り川口上信江川伊賀守と云とありて一益は信船

二艘遊々蟹江城申入むとする如く井伊直政は
為大なる追詰致ししに我々味方亦多し飛舟
令を預守伊豆志保も大なる追詰り責めん
と守水野友十郎掃部頭。父惣三郎忠重と云ふ
交りし陣しるる論を揮て競ひを火炮申す
威を多し滝川も此夫炮の程奉り宗舟二艘と
味方へ宗取を余の初意く示すし一登八崎子三
九郎後殿しと遊く城中小入る

十七日黎明兼てお孫し由滝川九鬼の云下市場
の城へ加勢の名に舟代志保と守是於は滝川長
監^{徳川}津^守治と云ふしるる大野の山口を攻め宗

地至信雄の士方約数十艘も出まきり是於山口に
は城く滝川九鬼の船と宗は是於。より一益あるに
と集取止長監の巨船は宗金と宗九鬼の揚長
と清と扇に大西攻詰す

十八日 神志保の船石川伯耆守が正井岩船津市
市野智且信雄の軍勢前田甚七郎の前田の城を
攻め事急あり城中指し保の事成らば宗七郎は
と云城を攻め濃州へ退く

或曰信雄大野の城に到り山口長次郎の忠
勲と大由称美す 神志保田小治と云ふ
時亦多し宗申す山口長次郎を攻め

く世累佐久間江盛父子迂流の時汝は
と不変道と遂く言神山とて辛若一今
度又佐久間山掃く多忠誠と拙事感心
す果不悔とありと伊後河の驍の良馬と物
後に取道し伊後河小川を以て改め
又曰田三郎大徳忠次向井官又小徳民那光
増不此時不援云とて大徳と赴きしる九鬼
大徳与勢也生津松浦と説と云く多私
數十艘小く小徳の浦と看家と説と説と
向井と庫原忠次と善徳と善切と名官高
と忠信と時三三小徳民那光隆説多討及九

鬼敗寸向井小徳官家也 林より感然と又和州の市

旆た東元向井小徳と子多内と云余勢州

挑取いひるを田忠次兼向井小徳官家

池向く着く追散く初施官内と共庫介也

廿是也討及と云

十九日浦井忠次大徳賢立身在陣の康と榊原小平左衛
政忠が河邊より長盛山口長次郎を討及と先鋒と
く尾州と市場の城と攻壞しめり 神君も伊
勢在信雄も友にあり大徳賢榊原忠次と伊と
去るに後援の無路と切と敵軍を程速く追圍
入るに兼て勢と云河内大徳勢と相不入

神君ハ世滅の後の沼持年夜芦ぬふる百を根影
交河申ふ蔓乾乾と人ちして蔓ふ佃一のあふ因果
くても根強と竹縁をかろるるあふく蔓も深
泥の中あむ事と不方城申あま却て是を不知
くして後世國と能く知ふ味方包河を渡り山口
水野老市馬印と持て先登り詰軍勢を攻入
城忽陥乾城於前田自平次のりぬる心と山口
臣牛内老市追慕んとこれを討ちと云云
廿日 神君命ありて十八日あり今日まで打取所の敵
首級百廿余小好山中送りし由田の敵あふ向てこれを
集す

一
誤り

廿日 龜江のあふ大酒川幸にありハ酒井信房討取
方ハ後部半兵衛伊賀組上平上信介康忠信雅
の臣三所周防守雄光西の方を信雅勝乾の方ハ
大頭買五郎信房の康忠を打圍てこれを責む城云す
余人を方信川とて國の河戦次母羽助助氏次を
おれとあふ時おれとて所蒙り信士母羽平次郎
以下多く戦死大頭買、隊おれと久世三四郎宣彦
白四半乃探物ゆくと輕卒と申和ハ包竹束を有
そのあふ當家の銃士お多て由兼と身て信房おれ
是城を廣く勝渡して保難く松陰山との丸
の坊と二丸へ引れんと能すれとてあふの討取

其人事を憂て突て一戦し主権合のありて引
合しとて海門守りあり谷崎右衛門前田
其日並み海門中丸乾の方の押へ滝川義徳
法衣と定め一回突ゆる事あり御も何れ
者く出戦て敵を城内へ追入前田家の城云
二死へ引合し海門守りの事あり海門守り
若四郎康吉と城主谷崎右衛門木戸口橋の上
て籠と合守若四郎火炮不中り城を奪り引退く
酒井五郎志利後仁和とて城を籠と籠と橋時
滝川義徳法衣突て御橋小島守りと追へ挿
と守若平源次郎家系後仁和如少の事を傳代日丸

其近正松骨と合守家系より海門川合若力日丸
清徳と合守若平久助日集義能木佐衛門と井
高志松梅村在守成と合守武井亮徳大橋新三
高志松死守近正の徳臣妻田久之郎日太郎海門
大智新徳海門守若平久助と合守若平源次郎
士桂村在守清徳家系内若平源次郎を級と
合守若平源次郎の定次を合守源次郎後政治武威と
合守源次郎の役を射を合守父是成徳と合守酒
井忠徳の惣徳と合守源次郎の惣徳と合守源次郎
合守源次郎の惣徳と合守源次郎の惣徳と合守源次郎
合守源次郎の惣徳と合守源次郎の惣徳と合守源次郎

渡六段、
誤り

指船源三浦 味方、あてはつた 余計多火炮より中て死
寸 神君哀憐とすれは、鉄の楯之十枚送るれ
く、は、是、は、是、と、流、競、ひ、つ、り、事、甚、く、此、後、重、江、の
勢、を、神、原、康、政、お、井、橋、と、上、て、城、内、を、見、透、く、火、炮
と、奈、寸、只、中、康、政、は、這、上、新、瓦、借、成、中、生、成、成、り、
佐、塚、九、守、康、政、の、水、練、場、を、潜、り、て、鉄、指、を、投、
て、敵、舟、の、羅、網、を、切、り、と、鉄、指、を、舷、面、突、立、え、引、
帯、ん、と、守、城、より、炬、火、を、射、り、火、炮、を、奈、す、と、こ、
とも、味、方、成、と、事、も、の、所、に、と、こ、に、中、城、に、お、九、の
百、の、大、砲、ま、つ、り、あ、き、を、並、列、の、積、米、お、茶、を、積、る、白、
大、船、十、八、艘、と、事、も、お、九、の、大、小、 神、君、感、一、息、

一人は一艘つ、彼舟とまゝに、既、も、奈、寸、の、井、橋、子、
の、方、より、火、炮、を、奈、寸、之、方、に、射、納、火、銃、れ、敵、舟、
へ、城、云、片、時、も、休、む、事、な、す、と、事、も、お、九、の、大、小、
の、舟、も、中、に、あ、る、流、石、の、激、川、も、困、窮、を、九、鬼、の、方、へ、
舟、と、連、つ、て、退、く、の、人、事、と、乞、食、に、お、る、九、鬼、が、境、
志、州、名、稱、の、在、城、より、大、船、お、く、蟹、好、の、沖、小、舟、一、隻、
代、建、ん、と、先、城、の、東、葉、岡、を、越、す、り、お、九、の、使、遣、返、り、
間、既、も、季、夏、の、短、杖、東、雲、の、空、中、お、九、の、使、遣、一、隻、
七、途、を、及、ま、す、と、九、鬼、既、も、形、を、悔、う、ん、と、事、も、お、九、の、
し、も、引、渡、り、を、送、還、す、す、り、お、九、の、使、遣、人、
百、五、十、餘、と、事、も、お、九、の、松、平、新、助、お、九、の、使、遣、小、舟、を、

系大船小編と舟掛引あり白の火炮小申て人
命と須守も人馬の味方より好く責めれ九鬼大
船と系小あめて這く道れある

又曰る石川の石川伯耆守の部下河原
江原の家長伯耆守の知を背き先世
て城中へ入る次松平の部下河原定房後信房
家入伯耆守の勢に漸く三善小系入る

石川志

二十九日雄丸織田源五長益の臣河原大郎と
豊江の城内を前田五十郎を害し神戸木造
と城と海に罪を定むる事あり河原大郎は白一足光

と依堂より津田友三郎を城におりし 神君先
程の侍大に人を城内に送るもくは一巻も信子武
人など前田と害し豊城の河曲に神戸
久那那木造と城と敵し益自今以後は信雄よ
属して忠とをすもの旨起請文を呈す事

武徳編年集成卷九

武徳編年集成卷二十

天正十二甲申年

七月六

三日滝川一益、甥我々、津田友三郎、質とて、
この城をとり、大坂、豊原、をめぐり、神君、まを、
とて、城、つとむ、前田、五郎、是、狭、の、邑、は、過、り、
と、夢、に、湯、ふ、城、を、の、れ、去、を、一、益、の、甥、涼、八、郎、追、蒐、
く、討、た、る、を、と、て、意、あり、神、君、に、献、け、給、へ、城、を、
あ、く、死、を、定、め、勢、州、木、造、の、城、に、送、り、る、を、途、中、に、
く、て、兵、士、質、人、を、返、し、し、て、寺、秀、吉、を、江、の、海、後、と

しつ馬たりとしとも 神君の武威小ふりて
落きの告りか牙と喰う勢州兼名の上の衆
あり張陣せしむれく木造の城に富田まゝ
知信一益来るとしつと彼虎狼の心と云し城
に又一益神戸も勢を信雄と献し洛陽州
心奪りあり塔中も勢をくむる去る年多川の軍
厩場退口を後勇凛然としつ今何と勢怯弱
なりと秀吉いりや則隊族丹羽長秀も領内越
お五分としつあり福せし勢聖一益と地り
卒すしと云ふ

あ日秀吉勢揚兼名小陣すし 神君兼名陣

と登り當城を石川勢にふる 神戸は洛陽州
すく彼城小益代番し今及兼名守の砦を居
せられ組伊賀の士と攻め又切を成すゆ
神君松くまの勢地時兼名忠三
郎氏之立城すと見しあひ白子
と歴て三重郡淡田に砦と築しめ信雄の巨滝川
三郎兼名及三雲新左衛門の成務と兼名守三郎兼名守
皇の次女小徳
大舟三艘を城下
みりありしなりと以後秀吉勢揚より軍を濃州に守
十三日 神君清洲の城小軍を納めあり
十五日 赤田の作候と味方の作候と相合り
味方揚より款取指し討捕あり
十六日 淡甲の勢路甲勢巨勢に淡甲の勢新左衛門

とて海國せし給依り申渡先方の事ふり奉り
候也

甲斐源氏性なきを海國渡り色因様
とて候候を分判り池走寺より朱印を
せしめ仍候

天正十二年七月十六日 海朱印

海色次郎右衛門
同左
同次郎左衛門
河原内蔵右衛門
同左

同新十郎右衛門
田中織部右衛門
同海色次郎右衛門
向山又八郎右衛門
一昨年之
大垣図書
大橋大蔵
同左
海色但馬守
内及源十郎
同織部

夏掛源八郎との事

此月 神君の法妹を以信州より奉り城主保科越前守に
前守に奉り奉りて高き入興しめ後平男
を或人保科肥後守山光
山家出羽守氏重女子四人とありて家

或曰信白 神君丹羽初介氏次より授受の軍

忠と稱賞せしめ其の信雄もはくも賞可

有旨と通せしむる信雄より信州より米邑と

氏次は授けしむる云云

八月小

勢州小島の度流木造なる信長正或稱具原九郎
具政の子あり一

と郡戸木新介の専城とあり道一の信雄方と

蒲生家新恩の地回郡相りし事一徳田上野介依

兼の安濃郡津と安邑の官小狭り氏威を揮ふ依

之氏信兼封内の城とを修し人宛る人の軍士と

撰ひ置りしむ氏郷の領内は是等事の上級な文等

須賀に坂源氏等が相小生弱治る徳田小川小谷等

忠臣の在城守信兼の領分は是列係上野小分等

系元光加半田神戸長野内飛元浄寺あり是

全助連初子家一の族林の城も是信兼の嫡男

三十郎信備後仁民
近太補小野園の名字を成すと云ふも

木造大別強の相するゆゑも家の分内一時は討

く搦れ無家少款と初守信長畑也干時十
九

大云の強き強りの手並今迄首を切り軍二十級
ありたり烟島太郎河野十大云ありて力足那の地を
判抄の御由長今迄首十九級とありて余城金丸
徳田中仁徳門木の場野の天宮の勇士殊に地の
利小精しと幾ふ毎に切をせり東方の土皇
早あり八氏御并田丸中務少輔並改奈向く此辺
河原小比とありたり和安多那の天秋山吉野史
ゆふ言野日並といふ所小陣し和を勢州の國土
拂原刑部伊奈白川の上系地にも法し心を参
河原小比の地より死小陣しとありたり木
とむ城宮山と責ををゆふ出しと風ありたり城田

上野介分れた系光加取及木戸の地ありたり
亦城あり雲し川流れる組と淵あり初を谷細
く伊奈白川の水と流し心は深田あり是景を漸
く群を待ひ時を候りたりと幾といふものあり
東方を廣野河たりといふも城際僅一町あり
巾なりとあり城切て並先を大軍押入来ふ能
て終り果敢及ゆふありとて各石城あり引返
るもありと國の火炮とを多く木造物築きつと
是を築すといふ音ありたり互に絶合を廢めす
つきの首敢令城り決しといふも木造方金子十介
中川小流鳴を伊奈河の烟あり後改り大塚河

且近江より来る者あり亡命の道れものとも折折
歎地へ折折し分捕する事今月ふりて止すと云
十四日蒲生氏御心志郡小湊の住長村邊長勝
左京唯後せしる渠と御守とて式子余云依
田の城と改る城云突つ音池内匠の彼と打破る
干時氏心直習(る)の仕士とすめ是を後也和田
衆事丸若田是清池田亦源寺亦討れとも敢
て不肖淫墨を越へ城内へ攻入り城將長長越
中亦去るお丸の將吉茂三大夫人宿期の一戦
と潔くし首と八角内指を獲くとも亦し此ハ
敵の中を折折退るり又戦死する敵の城云首七指

余人城既不臨る民御又より夏佐田の城と改付城
於城山次第將能拒する時よ伊州より小富具親
是ハ大納言
咄具度子来り世保大花を氏心へ告りて曰信長父子
ハ吾冠儼たり依り秀吉へ送んとす物亦惣別ハ
元祖累世の曰國士民何そと好まを志んや氏心
許容せしめ扱と改り遠城を修りも言を述る民
御これと承諾し則具親よりて城將と和を誓へ
彼城と改るをんを述る小湊の士も又城山と改
尾州へ退去す及ふ戸本の城より着京の若蒲生
家の上坂左文字へ使を立今りよりや若川ふて物
と此ハ船を取出せしる左文字此事を氏心は達し

百者一人を以てと虚実を伺ふ如戸木の侍は
鶴の切名を以て百余人鶴二三十羽を携へ雲の
川を上り又鶴をつらふ事ゆりまを
十日木造の鶴より敵氏の館の奥を指し是後
なる形勢を脱しその根城を田中仁左衛門畑作
金子十助堀金左衛門中川少左衛門天野与助左衛門畑
左衛門小川表左衛門思惟左衛門田川取左衛門
急の地下人跡金左衛門却て敵へあはれ兼て
氏以敵を迷ふ大砲を奪すへ一砲を射すや忽
ちまうり如法に一挙を闘を可変と信く敵令
しと根を切りしもあはれ氏以名月を射し根を

誣吟する如小川の子に砲聲を及ぼるたは
忽ち一緒に城の門を脱し螺を吹せ只一歩を歩
つあゆむと追ひ七、八歩を越し木造勝兼と云ふ名
て家形は伏立あつた風のことと云ふ兼てあはれ氏以
て敵を越し先登するを以て知て大砲を敵事ゆり
しと氏以鶴尾の曹に命じて敵事ゆりしと云ふ
曹たる敵机を不傷に氏以中野氏の槍刺の要
候を宥め大陣流の双淵に身を伏し強弱小策
を打て、一方は地中り或は槍を以てさふ傷し或は
鎌を以て突きし殆ど勇銃凜とて向ふ敵を
し池田の三浦が凍れしと不陸木造の侍は

少飛トハ歩立少飛難刀と云民の事の手首は折
んと次時に民御の臣田中新平八氏と書と
並へ働さし流中川少飛は事につる民は又菅
泷の言糧より少飛の心向て鏡を以て少飛の胃
と難ととも少飛は切菓る中川某立隔り
又少飛は為し命を預守在村の色ゆて少飛は民
字折り難し民は駿馬と云少飛は歩立た
多へとも事な民字外池也在事と良重
後六と但村より次地田亀之志若田市屋の長平
飛吉村は文系切と命の外池長吉も戦死し
河助屋の信解通と志在四市と事と安後称
浦生首

級を以て是源八市干時十八星、
後改義太夫、畑江作と書と組は
起而中半七を改後改子
三男、怯弱ありて能く捕ら
ぬるは是を見し畑と一太刀切て均く源八市剣道
して作三流の首と云。在村也と云木造方大家
流之序天冠寺助也即ちも討是を介甲士四指余
と預守也と云木造勢方田也との九地来り
云云と城中小引入死没するものを尋るも難云云
百餘と云云
十六日昨夜中川少飛は中川黒川を地合
流の奴僕も持するは渠と味方、虜ありらるる民御
彼首級と持せぬ僕を木造方、返中川少飛

称負すり軍敵の... 氏... 那... 護...
廿九日秀吉の先隊尾取海東郡小口丹羽郡...
中進く陣... 山... せ...

廿一日秀吉とて丹羽郡上宗良村... 九久地二井茂...
吉に... 賊... 秀吉と... 信... 那... 陣...
け 神君... 山... 宗良川の... 近... 水石...
小... 築...

廿二日秀吉丹羽郡上宗良村中... 大野村... 丹羽村...
河田村... 若... 築...
廿七日松平... 助家... 宗良川... 山... 築...

二田... 八冊...
長考... 後...

の... 秀吉と... 田... 山... 宗良川の... 近... 水石...
廿八日秀吉とて小坂... 築... 取... 放火する...
取... 神君... 丹羽郡... 岩倉... 丹羽...
廿日越中... 神助... 神君... 信...
へ... 命... 加州... 前田... 又... 利家... 臣村... 丹... 赤...
藩長... 兼... 富... 丹羽... 又... 丹羽... 山...
城... 守... 事... 急... 城... 築... 築...
里利家... 臣奥村... 聖... 藩... 永... 後... 秋... 冬... 春... 夏...
伊... 龍... 丹羽... 藩... 州... 東... 藩... の... 城... 郭... 築... 築...
既... 丹羽... 藩... を... 破... 僅... 丹羽... 藩... 築... 築...

奥付身命を棄て防戦す利家此言を以て先
とてに禮の上節を捨てて命を以て死の志を
卒小流し汗馬忠勇を以て前田右近秀経の津渡
の城をとり末森の隘を事と知れし故に末森
と地志山清原康房の長徳此村傳を承徳と始半
田半三原先和して火炮を以り底を以り藤原勘
六北村三右馬の富田六右衛門首級を以り改を
大に敗れし末森の城を危殆を免るは如改を以
知越中の運河に能く堰めしは行程僅あり今有
利家信士村井又三原長徳を以り里巷を放火す
へき首級を以り長徳を以り放火す

此坊す利家後より西宮の采邑を村井に授け
此月甲辰執入たり了狭谷摺州木崎の城を築
浦原氏以總生の若君を以り信雄方摺場
の城と軍歩時あり

叙光録小 神君の功位中多三原三重
一向宗一揆の長を以りて永福七年甲子
年冬州を去り信州を歴はく當時氏以
て信雄方城と以見しは信雄の
郭に信雄ありて夜よりして信雄の
日十間も一見はしりしは信雄の
此地信雄ありて信雄と是を以り

せんゆ名猪ハこれ由佳魚一尾と云くぬ
猪を足下ノ所を換へて大ノ城ノ
城ノ後を見らふと云く氏郷の
不遠三浦鮮魚城ノ後を傍と云

九月大

七日秀吉茂吉に陣す 神君信雄ハこれと追て
茂吉不討り也

十六日秀吉より前田利家父子より赤松城の援を
賞し一管を呈しを臣家村助在場より永後迄
下指津等に伝叙せしむと云

十七日 神君の陣より大ノ海軍を
候ふ也

候ふ也と云く今 神君ハ千と奉て敵陣を
今金の島の沖馬標鮮魚と見えて秀吉の
五子の嶺何といふ事ハ混乱ハ為れ
去といふ且猪籠ノ事と云く今此陣を
里 神君ハ敵の陣より打入事と云く
中堂の陣と云く

廿五日秀吉上なる長村大野村川田村の三
終り宗存と入る好日立陣の切
廿七日 神君信雄と小清洲
久世坂家信ハ當城赤田の敵

之地方の士族得るに難し進んで利を失ふ
時より久世三四郎、瘡痕を患るる是れ
て池に追来り、敵を打捕り、飯部三十四郎も
又此處に敵を討ち、其首一級をとり

廿月、神志の麾下、信曲の木曾丸を以て、我昌志と
交り、赤吉は屬し、高見由若とも、赤山村甚云
清良掃と、黄立丸味方、信州の伴科、返務伊奈の
菅沼小大指、定利と首取らるる、彼若を討つ時、
濃州金山の城主赤石直忠、改より高見へ援云と
考へ、其後高見に援難く、赤石直忠と云へる、其時
小款、暮ら如に、伴科、取あち、赤石直忠、援敵し、赤石直

く帰朝

十月小

朔日、秀吉、勢州表、(馬)の由、告来り。

四日、小牧山の砦を破せしむ。

六日、秀吉、勢州表、名取、羽津、と、告り、城は、破れ
在り、後、飯部と、同、名取、城、の、城、主、黄立、は、難、也、と、告
る、赤石直忠、は、同、名取、中、江、小、お、て、對、陣、し、法、軍、を、兼
名、長、橋、小、比、一、兼、名、の、城、内、を、是、三、州、の、石、川、伯
耆守三を、飯、渡、田、の、砦、と、六、波、川、三、郎、を、捕、り、れ
と、告、復、す

十日、賊、甲 神志、小、牧、山、清、原、丸、を、り

十六日 神君の命ふらりて酒井左衛門尉清洲の城
とあり且神原小平を康政を以て小牧山の無名
多由を命せし家杯世田墨元より用水之く墨
味略をりて之を初め命を命せし家杯をりて
之聊難攻す信之康政を以て堀原等と名
一廿若と可も自 神從り則康政を以て家
本と集め早向此軍要害疎ありて修築も又
全かた其善告の指擧せ可引支城郭より向
上とも何地不於く女とも生命と君不献せし事度
幾すも知あり秀吉程の英雄彼擧卒を引支て
送んはけり大支其の由是日同者不

是を康政大に感歎して 神君へ上り及
神君汝に命せし勇士おと所居し初
めは信守すし事代等より後ありあく用意
と可女の名と信守し小牧の若く小牧山より冬州の要
路たる松平を助家忠告新八郎定盈を入
るる各命より彼若とを清す

十七日 神君岡崎へ凱旋其馬を休めし神原康
政小牧山とありし家杯是時近きと白土の取
前半切桶とありしを交及し土と水ありし
取前川に酒油を以割する程ありしを以
堀原の中より白土とありし秀吉大井候の内小難

りてそを監臨しめ先要害よりなる曰墨江
筑りて天守の楯櫓を引置んとす石部あり
徳川家よりおとしを歎息しそより松和暗乃
企案起すと云云

廿三日秀吉勢之を那羽津ふゆ法乃傳へり
由代信雄より急を告ぐるの旨清洲を去るの河井
忠次らねを長崎へ送る也

廿六日小幡市橋村失火して民家少く焼亡すと云云

廿八日先小堀坂甚内廿治後中僅廿二十余騎也

和州等々をとり伊賀の國より入國人を調略して
味方より知小出國士信長父子へ恨めりて九龍津

治より舟を以て横人を以て安治洲上陸の城を奪取
松本人の土を奪えんとしそ源人質を五國に秀吉
不斜威して後日今度侵して奪ふ信雄の分家の
内を以て徳川氏分家の伊賀一系并勢州の内五
万石城州の内式万石を以て筒井次郎定次は揚り
大和よりこれに移る和曲の曰信長を奪る者于其友
へ負ふとも旗下の國人を以てする水の多かりて定
次は飛入の寡なり其分家の不足あり則伊州の
上野と居城と伊賀を以て好守大和より定次は
屬く伊賀より移る事ハ松倉右近を政所にして
膳徳定中坊宗孫秀正中坊伊藤元清けし知

泉秀波山崎石見備前赤松備前助好等の事
其今迄大和八箇井領を并旗印の大小名
邑と織田信雄の旗下法務山布施領邑たり
今度國士大略段収せしれ和州一處より秀吉の連
横濱渡守秀長より授けし由之の内若尾中領を
女指し且十市布施を分令の地をゆて秀長が
所屬すと云ふ志麻呂一處も九鬼右馬允和隆後仁大陽
より秀吉より賜り伊豫の飯高郡川段河曲郡神
戶の約甚助正俊後仁推樂頭改讚政守 藤子種赤坂南郡木造
介信小村赤の飯高織田上野介信兼に均封せ
給は麻郡上此分八信兼の旗下方郡た赤光知

向くとも云ふ秀吉を揚八万金入揚州之を和津
中津に於て八月永山に化せ給は是信雄素
右の城にあり對陣あり秀吉日々城を圍むるは
也か對りしと云ふ 徳川家より赤松不備
をぬき還云僻易する事ゆて控卒を養ふとい
ふ事と云ふ

十一月六

四日 神君の勢小牧山の砦を抄捕す
六日 畠田平右衛門知信津田隼人と秀吉近づく
これ信長の厚恩を懐かす事云ぬめをすへり
赤松の賊臣の智を瞬息の旨も亡くす其の憤

り志泉下に宿く九つり為臣切つて並みしと
とも信孝信雄奸臣の名を告ぐと一秀吉を以て
事と企めおぼし止軍干戈を起すりのあり是
迄信のお志好んぬ今く洋謀の事神皇の
御心今既ふ信雄の軍川下移り於志誠を以し
天下の武將を仰りて武人僅く演説まじと云
ふ西軍大不丹心して業を成りて古方雄久是迄清
兵衛ゆへに和断を相争る如信雄の為家 神君
にお誠すもあも不及是を許しあふ合置す
の事卒おに返るを仰り蓋し秀吉邪謀深き事
て実なり 神君の龍烈ふ歎すくく日事を信り

信長の志願を記す 神君の志州におゆりあふ虚
と号すく和断を仰りて歎す

九日 神君云を卒人并ひ清洲におあり初て信
雄秀吉交和の節を成事を仰りて業名の城を守
備す石川伯耆守と西大將の許へきこれと歎し
且急し帰國せんと云云

其日信雄並味に秀吉の調略を臨みしをたに業
名の城の西方矢田河原に秀吉お対面す秀吉
信を少く携へ信雄の志好むを見て膝を居り平伏
し今日天の勅を仰りて無し忠をわす事
すありとて雄劔を献し早又信雄留田津田を流し

て白丸山にこれ着て能すもあり速く帰増す
云云秀吉の心算す

十六日信雄秀吉會盟河内と申す陣皆凱旋と唱
神君今も岡崎へ河内城ありと云云

或曰紀州漢雜賀の澄りの九根末寺の

僧流おとせし四木の長吉我邦古伝元親

所告く曰秀吉尾州へ大軍を率へし陣

日と思ふ大坂の勝云を認めし時時四木

の大云と信し舟を揚屋のりしと云々

おぼく紀州の云をいし大坂をとりしありて幾

ゆきゆきと平定す所のやふりしは成す

元親大に候て河内近き親恭と先鋒の

と河内河内軍を率へし且福海を

と和を紀州ふき彼國の一揆と紀州

せし紀州の先守護富山なる佐賀政

守長入た
ト山の首領も先達す 神君ありしと云々

きし紀州の浪者地を急ぎし急ぎ登

りし河内の秀吉は後より之の旨を諭され

はれ八月十六日根末寺迄も陣守信吉

我邦へ反上の防泉州城ありしと糧砲

おを買ひしと自改と調略して四木

河を僅次元親へ使節渡りし如く江島

大坂の事と小牧山ありて兼て焼通をたの
むに井伊直政の倚りたる旨を信じて
時々御命に曰く此も合す前記に於てハ
東西より立映て一旦は雌雄を定むるに
守り可き此城ありては必ずしも信親
の守りありては富山直政も謀と先て之云
離散すと云云

秀吉大坂を攻めて毎日平定河内知信後任九津田隼
人と漢江近市一和と云信雄も亦漢川之弟秀
信雅と信俊と云 神君治政を極くを善んを
守り右川伯孝等別を頼みをして曰秀吉天

の事と信一治候者くとも風を立當家の軍卒元
小比古直政十合の一あり且少の上城ありて是に小比古
直之方と頼むとせん軍永久の謀ありて是より交
相ありてと迷ふ 神君治政の善んを信じて
しと云も豈秀吉の大軍と畏んばいませと雄雄
と交せずと何の日と期すかと云ふに敢て秀吉
直政を頼むと云ふ三便ありと云云

廿一日秀吉権大納言從三位守九郎干時四
廿三日越中國守佐内代助直政信雄方より
前田利家と合戦し光信を送ると云ふも信親
秀吉 神君と云俄して確據を交せん守御れ

一、奴改越中と命せし利家とて居ふと云ふ礼入
せん事と云れは縁一、二、三日情極すも奴改
かき事と云はりとも利家とて虚実を伺ふも六
日と居へし既中実あるは我聞て之を僅に
小と云ふへし危角して其日を居んれと云ふ
奴改帰来すへしとて信長の日とて病と稱し佛
の五六人近習十人のあき首を知らせ常の毎
食を痛室に運せしは百人の物掛とて今り山
の城と云へし更し我の莊所深雪と踏分て信
改の事と云ふ、賊臣の事とて據る事とて越
里の余り一首の形奇と賊す

かき事と云ふは世の中
あつてもや雪の白く
十二月大

初日修め奴改の事と云ふ若し信州諏訪の
訪安藝の形と云ふ羽書と漢松と持てこれ
告 神宗と馬五格足踏る百也と云ふ事と
今奴改の踏安藝の事と云ふ事と云ふ事と
てを判ぬ事と云ふ

二日三雲奴改の事と云ふ
細馬と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ
信長と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ

尉の山あきけり

三月二日

家康

三雲新助

四日作の内飛助渡りしむるに大久保七郎の書
書きたるに依りて定食せしむ

六日 神君依りて改より討能なり 改より曰ふ今
殺信雄を救はん先君の勲目を遠より守る事
因りて是を感歎せしむるに云々 改より
秀吉とて亡しぬるに信長より御知の依
指を以て 神君も献す 神君の曰ふれ先に秀吉
と評極よと云ふ事 信雄を援かん為也今も國郡

と侵すの心計 統率も秀吉を以て信雄の味方せん
旅とてさるるに下りて是を裁中し云と云ふは是より
援かすを以ていふより 山内東よりて是を以ていふ
改より曰信長と親を以ていふ事ありと云
謙信信長同意の由は乃中山より援かすに忠敗
亡疑あり 今も三州の外に信長は分國
甲信三州を以ていふ改よりも謙信の分國哉
中を以ていふ信長謙信同意するに似たり 謙利
孝の中より首を以ていふは是より産あり
却り信雄へ再奉の企てすむと云ふも必後
く云々 帰國す

さかき家傳ふ 神君を信言りて次郎正
長後任ふとて呼ぶに似る揚子め是西家代勇
略の士と宣ふ如改の白當時の侍候
公のよきとて譜代仕勇の信多き事ふ
人好しと云ふ

信長は後酒井忠次曰昔家おはる信長の言
夫とて向上に思ふものか況や如改とや唯と
近信長の長今とて英雄の譜信またと君を
信言り唯ふ對ふのち夫と述る事奇怪なり
此度の盟破りもあつて誅む人として冬河
らり越中への通説と見せりて信阻隘路あり

信も表流生の吹雪六深雪を詠むる旨傳報
寸依て但弟と越中ふ事 援云の事と止る
今度神君の弟或大捷の石次言於郡お妙法
當時秀吉の麾下にありて内應の信長不意破
るの信候もあふ被候と死に好まざる人事を
之を謂ふ声名伊達長房を助吉川おと云ふ山陰
原奈太夫氏立の臣二十人連署の起請文候
て氏重信と二の心懸たき候と云ふ 神
亦極早の臣及物置あ平昔居りてとていふ事今
誓盟を以てこれと云ふ送る兼て紀伊お生
治よりて猛威を揮ひ来りお送らるる如白信

左衛門尉一人今長よりを志と秀吉不遂しく紀陽
へ旗を色あめりし先客たる人事を欲す友に於て
秀吉有田一郡を南守の天野の在野上山京心
を白根に授けし秀吉不帰時守の軍と暮らして
汝知小今後根来難攻の一揆秀吉の尾州へ奔白
すもを慮りて一揆有田へ働く所不秀吉彼
一揆を憎く益白根の内を称兵す
十四日信雄今度 神志の援助を乞ふと謝せん
乃不強はまじり酒井河内守を忠告す今令集
く上はに城の勢を 神志へ討敵して
佐川及の造氏昭はして秀吉再の難後してを志

と稱すもいしと述ぶ

十日 神君淡路の城内に於て信雄と答へり
信雄曰 佐川家元より秀吉を仇とめり守備不
事と致し是を掃くは信雄既不秀吉と交和する
は子く和を懸へ當後一人と秀吉は送養子たり
めん事と欲すといふ秀吉の使としてち方勘藤
権久好田もて今の子は 斯く 佐川殿の庶子と
成子とせん事と願ふと斯く 神君法祥は
ては異父同胞の連枝三郎四郎定捕を送りし
子の旨と宣ふ信雄も悦んで淡路より此由を天
坂

廿五日信雄形を 神君あてて 濱松を奈次時
酒井河内守と先客として 信雄を伴へ魯州
吉原に放逐すべし 信雄方に是を謝し地
獵平へ産物も賜ふ先通へ三郎四郎定持上
京の爲梳装束送るも書を別め知母君信色
の御定持、先通之節請儀今川へ傳へて 後甲
州へ棄てられ候時 宿願ありて是の指を志
く 鹽屋と日守母守 誠は悲し不堪今公敵と戦を
め 他邦より此の時定持を以てこれ程年の
力とすりぬ渠と敵中へ書す母守のいふにあり
友に様々 台徳の度先旅氣丸をさす大坂

送る石川直春と諸次と守護 子孫の代々
仙の丸仙の丸 仙の丸仙の丸 仙の丸仙の丸 仙の丸仙の丸
あつた河州より耐料を方石と授く 後結城より
秀原守是なり

或曰小畠具親ハ信雄の仇として世及秀吉
忠を願ふすりぬ秀吉信雄と親と教習
信通生氏之竹庸として方石村ありあるを
控へてとも辨へて石更今氏臣たる人等
信より信より秀吉とて 別家の信臣たる人
秀吉達せしめ
この力家信より白母とされぬ清長公使として

上唐守秀書院人之後好圖書也建長に
投せし歌

源名家傳曰源氏師山清十五世に七家
人子列寸^{好歌}是ハ今川伊豫守氏詮^{好歌}好歌
因幡の浦守名久保新三郎山友^{好歌}當時豆州の
少保^{好歌}源氏親^{好歌}所住^{好歌}弘漢^{好歌}和^{好歌}事^{好歌}家
今列寸^{好歌}後^{好歌}不^{好歌}子^{好歌}世^{好歌}守^{好歌}山^{好歌}元^{好歌}親^{好歌}事^{好歌}乃
事^{好歌}也^{好歌}守^{好歌}云^{好歌}



武德編年集成卷二十年

